

ねがいのいえニュース 第46号

生活支援ハウスねがいのいえ広報紙・2017年1月15日発行

発行責任者：藤本真二 〒331-0071 さいたま市西区高木185-29

Tel (048) 626-1909 Fax (048) 626-1920

E-mail negainoie@r6.dion.ne.jp Hp <http://www.negainoie.com>



新年明けましておめでとうございます。昨年は、社会全体にとっても障害福祉界にとっても大きな試練の年でしたが、ねがいのいえにとっても、不運が続く大凶の運勢だったと感じています。

特に、突然の退職が続く、現場スタッフの負担が増す中、利用者のみならずにも要望に応えられないことが続きました。こちらの力の及ばない個人の事情でやむなく退職することになったベテランスタッフは、「ねがいのいえが本当に好きでした。今回は家庭の事情で仕方なく退職になったけど、いつかまた一緒に働きたいです」と語ってくれました。

みんなから愛された彼女のまわりにはいつも笑いがあふれ、いつもみんなを支えてくれました。そんな素敵なスタッフが残してくれた大切なものを受け継いだ若いスタッフは、この職場をさらに成長させてくれるだろうと信じています。

これからの一年がみなさまにとっても幸福の年になるよう、心より願ってやみません。

理事長の著書 好評発売中

昨年末に出版した理事長の著書「行動障害が穏やかになる心のケア」は、これまでに学んできたメソッドを紹介し、それらの方法によって支援してきた実践のエピソードを伝えています。当事者やご家族、そして現場のベテランから若い職員まで、幅広く読んでいただけるよう、論文ではなく物語のように綴ることを心がけました。障害のある人に関わる全ての人に読んで欲しいという感想もいただき、おかげさまで好評を得ています。

その中で、私たちの心のケアでほとんどの利用者のかたが穏やかに暮らせるようになりますが、癒しきれない人がいるのも現実であることを報告しています。

その人たちが心の奥深くに刻まれた悲しみから解放される日を目指して、3年がかりで新たな勉強も始めました。まだ半分を終えたところですが、先日、今までの実践を超える驚くべき体験をしたので報告いたします。

朋子さん

ねがいのいえオープン当初から入会の朋子さん。小学1年生ながら身体的に重度な全介助の障害は、病気のご家族には負担が重く、幼い頃からの利用だった。

母と離れる経験が少なかった当初、お迎えに行き車に乗った途端、「おかあさん、おかあさん」と激しく泣いて寂しかった。年齢が上がるにつれ少しずつ泣くことが減っていったが、それはとてもゆっくりな成長だった。

2年前の春に高等部を卒業して生活介護に通う今、ねがいのいえは休日の移動支援と週1回のショートステイだけの利用になったが、その時にもなお「おかあさんに会いたい、帰りたい」と言って泣くことが頻繁にある。

多くの利用者が、家庭や学校や他の事業所で、落ち着かない時を過ごし、ねがいのいえに通って来ると、心のケアの関わりによって穏やかに落ち着いていく。しかし朋子さんの場合は、これまでの私たちの関わりでは癒しきれないくらい深い悲しみが心を占拠していると感じられた。遠い過去のいつからなのか、本人も家族も忘れて意識に残っていない深い部分にあるトラウマのようだった。

今までの方法では解決できない、深いレベルの癒しはどこにあるのか？それは世界の臨床心理学の最先端であるトラウマ解放メソッドだと考え、2年前から勉強を始めた。3年がかりで学ぶプログラムのまだ折り返し点である。この勉強を終えた時、今までとは違う景色が見えるのかもしれないと期待している。

まだ道半ばだが、学んだことを少しずつ実践し、パニックを起こしているかたが今までより短い時間で鎮静するという成果を実現し、スタッフにもシェアしているところである。

ある日の夕方、朋子さんが利用を終えて自宅へ送る時間になった時、その混乱ぶりが見たこともないほど極限に達した。まるで心を病んだ人が幻覚に襲われた時のようにも感じられるほどだった。

学びのプロセスはまだ道半ばながら、この2年間で身につけた技術を試みた。もはや話が通じる状態ではなく、言葉をかけるのはあきらめて、迷走神経系の流れが変わるよう静かに手技を施したが、一向におさまる気配がなく、ひたすら続ける。

15分経った時、朋子さんの絶叫が、不意に止まった。

予想していなかった事態に「あれ？」と思ったその瞬間、朋子さんもまた自分に驚いていた。戸惑ったように一言、「泣かなくなった」とつぶやいた。

「泣かなくなったね」「うん」

その後、自宅までの道のり、一日の不調が嘘のように穏やかに会話をしながら帰った。以降、一般的に落ち着きが見られるようになった朋子さん。そしてその日の成功体験によって、自分でも大人になったことを自覚しているようでもある。元に戻ってしまったかのように泣き続ける日もあるが、スタッフの関わりによって短い時間で落ち着きを取り戻すことができている。

今まで研修で様々な方法を伝えてきましたが、この方法については自分自身がまだ経験を積み上げる段階です。今までよりもさらに心の奥深くまで届く癒しのメソッドとして確立できた時、新たな研修のプログラムとして多くの人に伝えたいと思います。そしてそれが、私たちの社会貢献であると思っています。

